

幼保連携型認定こども園 YMCA 保育園 12月えんだより

12月の聖句 「学者たちはその星を見て喜びにあふれた」
マタイによる福音書2章10節

朝晩の寒さが、冬の到来を感じます。その中でも元気な子ども達の声が、園舎内外で響きあい、自分を出しあって過ごす姿は、心の内から輝いてみえます。一瞬、一瞬を躍動する姿は、「生き生きしている」という言葉が最も適切な表現かと思えます。保護者の皆様も、お仕事、家事等お忙しい時を迎えますが、心身共にお気をつけいただき、お過ごしください。

さて、最近、講演や本で出会った言葉に、ネガティブケイパビリティ（negative capability）という言葉があります。これは不確かなことや不可解なこと、人が疑惑を感じる状態の中に留まる力とか、答えの出ない事態に耐える力とか又、事実や理由を早くに求めずいる能力といわれます。科学が益々進歩していき、加速度を増して人間の利便性や心地良さ、安心や安全、認められる欲求とは裏腹に、人間の想像する力、感じる力、創造する能力そのものが衰退し、互いに感じあい、響きあうという人間の力が衰退していくのではないかと危惧されており、この力をつける必要があるということです。これは、相手のことを真に思いやることにつながる力とも言われています。

今月の聖句は、学者が、生まれたイエスに出会った時のものですが、当時は、今や未来に希望を持つことができない時代の中であって、不思議な星を見た学者たちが、ただ星を頼りにその現象の意味を確かめにでかけたのでした。好奇心だといえればそれまでですが、贈り物まで携えて遙々旅をしてまで行くのは、どんな思いを持っていたのだろうかと考えてしまいます。無論、私達にも希望を持つことはあります。勝負であれば勝ちたい、自分の願いを成し遂げたいとか、認められたいなど、直ぐに思い浮かぶのですが、ここでは、誰かに面倒を見てもらわなければ生きてゆけない、弱い姿でいた「赤ちゃんイエス」に出会うことでありました。それも大切な贈り物を差し出すという、私達が考える希望とは異なるように映ります。

自らを明け渡す時にこそ、本当の平安と喜びとが満ち溢れる。そんなメッセージと、ただ星を頼りに、不確かな、それも本当に自らが救われるかどうか分からない状況であっても、耐えて信じ、自分の疑問との葛藤に打ち勝ち信じる先に希望があるということです。子ども達は、私達の想像を超えて変化していきます。それは、大きくなればなるほど、自ら興味を持って、関心を持って、想像し、創意工夫しながら生活していくからです。改めて子ども達の成長する力をどんな状況であっても信じていくことを待って過ごしていきたいと願います。

12月	乳児（0,1,2歳児）	幼児（3,4,5歳児）
月主題	うれしいね	喜び合う
月の願い	<ul style="list-style-type: none"> *クリスマスを迎える雰囲気を楽しみ、喜んで待つ。 *保育者や友だち、家族と一緒にクリスマスを喜ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> *クリスマスの意味を知り、喜びをわかちあう *いろいろな人のことを思い、自分ができることを考える。 *気持ちや考えを伝え合い、分かち合いながら友だちと過ごす。
讃美歌	おほしがひかる	きよしこのよる（こども改98）